碁譜　天

共三

能勢

二百十一冊ノ内

内閣文庫
和書 類
三六〇八八 號
二二 冊
三大 函
一〇 架

394

内閣文庫
番號	和	36088
冊數	211(107)	
函號	156	17

碁譜　天　共三

能勢

二百十二冊ノ内

内閣文庫
和書
類
三六の八八號
二三冊
一〇架
五六函

内閣文庫
番號　和　36688
冊數　211(107)
函號　156　17

国立公文書館
National Archives of Japan

閣
594

記録御用所

巌有院殿御代

能勢 源姓

高三百俵

家紋 椰子 牡丹 桔梗

十二月諸名乗

寛永将軍ヨリ御代

五七桐

能勢摂津守頼次女

近江局 初 福

女子

将軍家綱公ニ仕後退出以後高ニ而被下置
御判ハ能勢摂津守村信

能勢兵馬頼資妻

一正保四年六月廿九日甚左衛門死後
慶安元年 月日不知 御免され
厳有院殿御大老に年寄名代近江守
なされ 右信十人被揃かくて 日二季
罷出日 日光山往来の時小傳の役
を路次御楽 田楽と云らしことは
高田七面大明神の別當宥朝院日
暉よりハ祈禱をたのみ祈禱せ
しめしに御感あり有りてたまう官

敬信院殿御不例の時祈禱して御感
有りしハ 御往来の時日暉より御膳
中御守 御祓一巻の法華経を
献上 慶安四年
厳有院殿将軍宣下の時 [illegible]
仲の法華経を 御目見をとゝく
高田七面大明神より [illegible]
[illegible] 明暦二年十二月廿
[illegible] 八日

右大将家の旗を御厩に入らるゝの時
金燈籠一連寄附（瑠璃宝珠の方附の箱をあらため
南無阿弥陀仏の七字を彫刻せり）又寄附戸帳又寄附水
引又寄附挑灯又寄附せり
毎年正月二月二日より二十日まで御一字の
御祈祷のあり御書を納められ
かたうたのやう
寄進
何某
某日 勧進

○睦月は往昔今村より
大猷院殿御産所御殿の旧跡にて近江
より移し寺と為し檀林と号す建立ありしより
○寛文年中
厳有院殿 御直筆人丸の画御寄附
同じく宥見寺村に建立ありて年々
大般若経を読ましめ二千石余加へ御寄
建立ありて天下泰平の御祈祷修めらる

一天照 稲荷 大両社勧請也天照
太神也
厳有院殿御尊神より納らる寛文
二年十月十八日往縁寺長大高松賀へ
高宮源太夫高松有嫡母近江新七
五郎兵衛右大高宇那田給為門千
年正月十八日往生長福殿如く
御舞新相しめ頂よ
高貴殿より四度之節七夜供養

のち此殿よりも御病ゆへ御尊
しく
厳有院殿 二も常憲院殿ニ而御尊之
御帰 御直ニ病所御祈御覧令
いつ頃より危篤ニ候へ病平り同
月廿二日午刻より右宿の御往生
二成ニ而其上ニも御當番医師ならびニ御
日柄よ之候所へ此節ニ而安氣成度

此かくて近江の要にてとなり
御城は只今度病死
御おんて思召し御腹立
遊ばし将軍家より御中
人勅使として平清盛を討
二百騎にて龍宮へ御座候
軍かけり御前へ請して源氏
わくやし上に後も近江の所にて
源氏への宮へ日も上度とはされ

に巌浪殿よりも信家の御中とも
程ありしは日本日月廿七日九六
十七歳にて池と不門寺と葬
近江死去のりし上御方ましまし
巌浪殿に岩浪殿をあ
岩浪殿よりは一七日の精進と御あるる
終えても格別の御ましまし老中諫
ありけしによりて二百日の精進を御
世と呼る三百の御止御あるまじ

といへり同年十二月二十六日大久保加賀守
殿より入来門跡へ近江七百
なるは東門寺へ千部読経料
御公儀より白銀五百枚米五百俵
御寄附ありけるよし御記録に候へ
高厳院殿よりも御香奠としてつる同
十一年十二月廿二日来廿七日近江
一周忌なるにより御香奠白銀百枚備
高厳院殿よりも御香奠としてつる

当年より御霊屋東門寺へ
寛祖のいゝ心霊院殿江進福のため
三月九日より廿八日まで千部
読経料米千石ありける建碑也
同十二年十二月廿四日来廿七日近江
三回忌なるにより御香奠白銀百枚備られ
高厳院殿よりも御香奠として

頼有

源五郎 初源助 兵庫

能登守頼資嫡子

嫡母 近江局

近江局天正五年ニ初而〇〇 彩ヨ

厳有院殿へ〇〇〇〇〇 寛文二年十

月十八日ニ召入 同十年十二月廿

又日御小性組加秩弐百俵〇宝永元

年十二月廿一日和田倉御門勤番

浦賀奉行〇二正徳三年七月廿六日

病免〇享保元年十二月十九日死

年六十六 法名大浄 〇〇寺ニ葬

頼辰

市左衛門

実ハ佐野家士 〇〇秀〇頼貞之二男

養子 年月日不知 書院番〇〇〇〇番〇

右行頭ゟつゝき二十六字数ハ元處
来合居ハ如く

衛紳　初　亀之助

頼富

実右郷今左京ニ男水野忠成（右郷信濃守ゟ水次庄介）

寛政七年二月十日御年寄ゟ門年

七月二日初見ニ而十二月廿七日

家督小普請ニ而享保四年十月大合

中姓組ニ而寛政二年九月廿二日寄

御番ニ而無毎出精ニ而定門川ゟつゝき

小普請入ニ而同ニ年十二月廿七日敬

免ニ而寛保十年三月廿九日死ニ六

十八歳円寺ニ葬

頼熙

伊織

実同姓長部牧高之男

寛保二年十二月十日生于○宝暦
十年八月二日家督小普請○明和
二年十二月廿八日死享年二十六葬同寺
[illegible]

頼惟　菊三郎

実同姓河内守頼貴二男
明和元年十二月十七日生于○家督

小普請○天明七年十一月廿六日御書
院番○寛政八年十二月十日西丸
附○安永四年十一月八日叙爵ニ従
播磨守○同役後寄合○同文年十一月
十日御役御免ニ従同年十一月令辰
後二度○寛政七年十二月廿九日出令
[illegible]追[illegible]

頼弘　右之郎

寛政十年九月十六日跡式之通
跡目之方取同十一年十二月廿日小
納戸之通跡目之方取

厳有院殿御代

能勝

源姓

近江国蒲生郡之者

高三百石

寛文 柳子杜甫 拾校
十月信 名吉

寛文九年十月廿八日 御七苑桐

御服号　初 新之郎　家号

頼澄

実同姓半郎頼隆之男

寛文安口
慶應四年 分廿日
御新番より直し中奥

不粧早百濃○同年十二月廿八日叙
爵○寛文二年十二月廿日兄
依身○同十年十二月廿五日江戸より
武蔵之遠江○六百石○大和守
十月廿五日出府之上江戸○貞享二年
十二月八日死去○歳大寺
葬

頼賀

十ニ代

延宝六年○月○日貞享四
年七月十一日家督○元禄
六年十月十九日○同十二年
十二月○歳
○同十四年十月廿六日○桐之
寿○同十六年八月廿三日○納言○
宝永四年二月十四日病死○歳

○享保十一年十二月廿日死 五拾六歳
同寺ニ葬
○近江局ヲ以
大猷院殿御筆一軸
常憲院殿御筆一軸并ニ御袷拝領

頼種

十次郎 初 吉五郎

享保十一年二月二日家督小普請
○同年八月十五日初御目見 ○同十二年十二
月廿八日西丸御書院番 ○同十七年
十月四日依病御番御免
○宝暦五年二月廿八日西丸御書
院番組頭 ○同年十二月十八日布衣
○明和七年閏六月八日西丸留守居
御役抱 ○安永六年十二月廿日死
七十五歳 同寺ニ葬

頼桐

孫十郎　初　新太郎

実頼賢二男

宝暦二年二月十四日者子〇同九年十二月廿八日初見〇同十一年九月廿四日末滴屋にて年十八歳にてうまれし者是入牧頼賢郡より太學者杉奔代輩

者子也〇明和八年十二月廿三日為院除たり〇利賢頼申之後〇安永七子八月十一日死七十八歳同寺ニ葬

頼善

大亨　初　元次郎　本宗

実父牧出雲守頼賢之二男

宝暦十一年九月廿四日奔者子〇明和八年十二月八日嫡孫承祖〇同

年十二月廿八日初而御目見〇安永六年
十二月十九日西丸御書院番〇同七年
十二月廿七日家督〇寛政二年正月
二日小普請組〇同七年十二月廿日小普請
務懸子〇同八年八月廿四日死去法名
同寺ニ葬

頼慶

十次郎　初　吉之郎

天明元年十二月廿八日始而御目見〇其後
御徒組二被成〇同八年十二月廿八日御徒
組頭見習〇御徒組頭二被成〇寛政八年
十二月廿八日家督小普請〇同十年十二
月晦日小十人書院番

東照宮御代

能勢　源姓　高千五百石

家紋　獅子牡丹　十二目結　桔梗　九矢筈

京都将軍より給紋　五七花桐

能勢攝津守頼次三男

惣太郎　初　徳太郎

頼之　初後德

大坂冬之御陣之先手天満口仕寄

右之○元和三年　朔御書渡番○
寛永六年五月廿八日御上洛依之
○渡兩御所○同九年十二月廿八日加判之
令吟味被相改候○同十年十二月七日並
御判員數可相猶○正保元年十一月
元日日光之御社參ニ付御朱印
拾人御朱印もとのままより同月
十二日御判○同月廿六日御先御朱印
十人小ヶ物(さる合)○慶安元年

六月十八日出羽國山形城ゟ渡○同
年十二月九日日光之御朱印○同二年
二月晦日二分判相改城ゟ渡○同三年
二月十日大坂御定番ゟ渡京大坂
御朱印代○同四年十二月九日大坂
御朱印○同五年四月日光之御朱印
○慶安二年七月十二日大坂御朱印
○明暦二年正月十一日大坂御朱印○
同四年四月　細川　日光之御朱印○万

治二年巳月廿七日大坂目付並組
仕勝部より之分○同年十二月廿日
大坂目付並組へ之分○寛文元
年十二月 組頭 藤左衛門之年十一月
六日被任猶子惣十郎より家督ヲ継
二男平十郎分組武右衛門○同八年
閏月十日死七十二歳武州在京都
池上本門寺ニ葬

元之

惣十郎 初 宮松

一万治二年七月習小姓組○寛
文元年四月目見御門往来被仰付
同年十一月六日家督○同年
十二月 組頭 小普請○同九年十二月
六日大坂目付播州多田銀山修理
見分同年八月廿一日母役免(?)福

紀伊守様江被渡○同十五年正月廿九日
御免被成○延宝七年正月十六日家督
御番衆御用船附土所役被仰付五百石
同年九月甲州谷村ニ而知行五百石
被下○同九年六月廿八日蒔田○天和二年
正月廿一日布衣以上之人ニ同右料
土屋相模守組被仰付由ニ而御書院番
○同三年
大猷院殿三十三回御忌日光御法事

用○元禄二年八月四日信濃守
土屋様江被渡○同四年八月廿一日
御免ニ而御鉄炮頭被仰付○同五年十月廿
三日火事改○同八年正月廿九日
被仰役免ニ而○同十四年八月十六日
病免○同十五年六月廿二日職任ニ
百俵被下○宝永五年十二月十二日死
七十歳同年十月葬

頼香　別家　三千郎

頼雄　別家　甚十郎

頼直　八郎左衛門　初　次郎三郎　兄甚十郎

厳有院殿御部屋住より被召出慶安二年
より万治元年まて勤仕〇寛文七年
賄頭　常憲院殿御書院番被仰付〇二百俵〇二不祿
元年四月廿二日死六十九歳実

子八郎五歳ニて死家督断絶

頼安　惣太夫　初　源十郎

大伯母追江大奥御年寄勤而
寛文四年より同八年まて御係
相勤〇同年四月十四日没く嗣見
〇天和三年九月廿五日小性組之
百俵〇頁二十五年　朝　御勤乃

之明

廣敷番之頭ゟ上勤の廣敷番之頭
之役被仰付○元禄十五年十二月廿三
日右御番○同十六年十二月十八日病
死○同月廿八日死早千日葬同寺

子無

別家　助兵衛　初　甚平郎

頼以

惣十郎　初　右太郎

元禄十六年八月御目見家督小普
請○宝永元年十二月五日初入○享保二
年二月十六日御小性組○同九年十
一月
大須之廣敷附○同十年十二月朔日免
御書院番○元文二年九月十五日
御徒番○同五年四月廿八日同日

正之忠度〇寛保元年十月二日
死四十七歳同寺ニ葬

禎則

勘平郎　初　洪次郎
寛保元年十二月廿七日家督小
普請〇延享二年十月廿七日御
小姓組〇宝暦三年七月廿九日
死二拾二歳同寺ニ葬

元長

勘十郎　初　源次郎　吉郎
実ハ同姓因幡守禎喬次男
宝暦三年十月廿二日続其子
家督小普請〇同六年四月十六日
御見〇同年十月六日御小姓組〇同
十二年八月廿九日死二拾六歳同寺
ニ葬

頼完　惣十郎　初　九十九

実同姓右門一英次男

宝暦十二年十一月廿日遺跡小普

請○同年十二月十九日初見○同十三

年十二月廿九日西丸御小性組同日

年九月八日廣亮○同八年十二月

廿九日御小性組○安永七年九月廿八日

死去二十二歳同寺ニ葬

頼廣　惣右衛門　初　洪太郎

安永七年十二月廿六日遺跡小普請

○同月十九日初見○寛政六年十二月

廿一日中奥ニ入○同七年

十二月廿八日御小性組

大猷院殿御代

組頭　　高三百俵

源姓　　家紋　十二目結　矢筈
東方結

組頭與浪号積類為代

新之清

組頭

慶安四年十六月廿六日浪人より御徒
より御番入○寛文十一年九月廿
日西徒組頭○元禄二年十一月廿二日

四拾才先行○同九年五月十八日
病死○同十年十月十日死去法名
八歳雅月夕岩東浄寺ニ葬

継人

市之橋 初 新助

元禄二年新組御従○同七年四月
廿五日御廊下番百五拾俵○同年十六
月廿六日御附廊下番○同九年二月

十八日御納戸○同十一年十二月廿六日
御蔵米百五拾俵余こ三百俵○宝永
六年二月廿一日御書院番○享保八
年二月廿三日上覇後今を夜○
同九年十月廿五日
惇信院殿御附○同十年六月十九日
西丸御附○同二十年九月廿日西丸
御膳奉行○元文四年五月廿日西
丸御裏門○同六年 七月

其夕日病死〇寛保元年十一月廿日
死六十九歳同寺ニ葬

頼能

市橋 初 久五郎

享保二十年十二月十一日初見〇寛
保元年十二月二日家督小姓組
〇同三年七月二日御書院番〇宝暦
九年十二月十六日上方在番今之其夜〇

明和元年九月朔日御書院番組
頭〇同年十一月十二日布衣〇安永
三年八月廿四日死去行年九歳同寺
ニ葬

能弘

市橋 初 鉄吉 右膳

初尚之
実前田大和守利理四男
明和二年十一月十七日聟養子〇

同年十二月廿一日御目見○寛永二年
十二月廿八日寄合小普請○同五年
七月廿六日西丸御小性組○同年十月
十一日吹上ニおゐて草鹿上覧之處拝領物二反
両服○同八年四月十六日西丸勤
○同年八月十八日濱庭ニおゐて草弓
上覧之○同年九月十八日吹上ニ而草鹿
上覧之處拝領物二両服○慶安元年十月
廿八日西丸附○同二年九月廿八日草

鹿上覧之處拝領物二両服○同三年十二
月廿六日西丸勤○同七年十二月廿
八日園的射之拝領物二両服○寛文
二年十二月廿二日吹上ニおゐて半的
上覧之處拝領物二両服○同七年十二月晦
日小命牧出行勢子○同年十月
八日草鹿射之拝領物二両服○同年
十二月十日西丸附

厳有院殿御代

能勢　源姓　高三百俵

家紋　獅子牡丹　十二目結　矢筈　桔梗

京都将軍ゟ拝領　五七花桐

能勢次左衛門頼重二男

八左衛門　初助十郎

頼俊

慶安元年御書院番ニ被召出

二百俵○元禄元年十月廿八日
死六十八芝二本榎承教寺ニ葬

頼忠

八左衛門 初 太助 万之助 助十郎
致仕後參

延宝六年十二月廿九日御小姓組○天和
元年十月廿六日御小姓○同年十二月
十一日小普請入○貞享三年十二月
九日御小姓組○元禄元年十月廿六日
父死同禄之外家督ス○二百俵元ノ
十月七日病免○享保八年七月廿
三日致仕○元文二年二月廿一日死
八十七歳同寺ニ葬

頼香

助十郎 初 源助

享保八年七月廿二日家督○小普請

○同九年十月九日家督○同十二年
九月廿六日吹上ニ而騎射御覧之時服五疋
○同十二年十二月十六日流鏑馬射留
同廿四日時服二○元文六年二月廿八日
御弓場ニ而射術ニ付同月廿六日金弐枚御
出火之節ゟ之節時服拝領仕候
宝暦六年四月十七日山里ニ而可享
御覧之同月八日金弐枚拝領○同
九年十二月五日小十人頭○同年十

八日布衣○明和四年九月廿八日
御先手弓頭○安永五年四月日光
御社参御供○同八年六月廿六日死
享年七十歳同寺ニ葬

△宝暦十年四月
廿八日初見

□安永五年
十二月廿二日初見日記

頼中
右京亮

頼完 △□
源之丞 助十郎 初 兵部

頼武
實ハ同姓小笠原重頼喬次男
安永八年十月廿六日養子ト成跡目小普請

清〇同九年十二月十二日初九〇天
明四年九月十四日吹上御的上覧
猪狩御供〇同年九月晦日鹿狩
組〇同六年十月十三日吹上大的射抜
弐ケ所二度〇同七年二月廿日火合
御狩当り弟子二人宮殿十年九月
十四日居合御前ニ上覧之節拝領

有徳院殿御代
能勢　高百五拾俵
源性　家紋矢筈井違
　　　丸内九曜中
能勢庄三郎　居合林村忠九
惠頼右衛門
平十郎
頼宣元
延宝二年 田付新十郎ニ而勤之ニて射札

百五十俵○宝永元年五月廿九日
二條御蔵奉行○享保五年七月九日
二條にをいて死ス谷中泰宗寺ニ葬

頼定　源之助

正徳元年十月五日初見○享保
五年十月廿日家督小普請○同
十年十月廿二日小十人組○同十八年

九月廿日死ス麻布盛泉寺ニ葬

嘉明　平太郎

享保十八年十二月二日御目見小普
請○元文二年七月十一日西丸小十人
組○同二年五月廿四日一橋殿江附
番○宝暦四年十二月廿六日元之方所
組頭○同八年十月廿八日西丸新番

甲番○同十年正月晦日二丸濟○
同十三年八月朔日甲番九初○同十二
年十二月廿五日西丸新甲番○安
永八年正月十六日出番九初○天明
元年正月廿六日西丸新甲番○同六
年十月廿六日死○六拾八歳○同年十二月葬

頼紀　遠酒加

天明六年十二月廿五日家督小普
請

東照宮御代

〇能勢　高四千八石

源姓　家紋　獅子牡丹 十二日結　桔梗　矢筈

京都将軍より御紋　五七花桐

頼光嫡子頼国十七代摂津国

住人能勢左近将監頼幸嫡子

摂津守　初竹童丸　助十郎

頼次

惣左衛門　伊豫守

摂津国能勢郡地黄村ニ在リ俗ニハ
居住し京東寺の寶積院今ハ別
院ハ積次の寺なれハ天正十年頃
寶積寺へ

東照宮御時御上洛ハ山国ゟ
ろし御尋の時松條ハ攝津能勢
郡の者なりし出入ハ御ニ見えけり
能勢し御丈松なれハ出膳被思
召より能勢十郎と称しけるの

名をやとし御名をつきさま寶積寺
出入けれハ松條ハ十郎名を賜りぬ人
十郎と称しける然し黒けなりし
まよつけハ其子孫ハなりかやと御尋
ありさ知れさん十郎と謂申すに
御十郎といふ人の子孫を十郎と
請なからも御書を下されて後の
御十郎ニ被遣候御書を御謂けり
○慶長四年十二月十二日右書ハ是れ

東照宮御代ニ 御在府の時石田治部
少輔蔵入圖書よりつさ御法有し
と紀伊人茂庵よ表右近之丞
忠政樹津本長改次女人出し小
東照宮 御こと小様ゟ治部少輔濃
ニ在り入ニ為様子見分使返ひ申つさ
もりの御供りて返えとそつ慶長五
年草勝の陣の後すそしつ上方
将紀とやうへ入れいそさ上方に登也

妻子とも江戸へ差越候 上杉景勝
并ニ大網織中ゟ召具有之云
而無其武様御吉救次ニ人妻子
を顧みもせて従供并関の東へ下
後の御陣の砌茂黄としく
ニ人の一倍の御恩を請て茂長年
九年大坂冬御陣并大阪口の仕お上
同廿年夏御陣にも従奉りし
殊別の御恩慶摺村より渡門

伯耆守ニ残置候故ニ御供も不
進ニ而有之候ハ、退隠仕候へきかし 御供ニ
出 松平周防守忠次居郎明後心長
盛と私縁ニ付而 大坂落去の間
御しる近仕候處 御陣中の様
御供ちかくニ相見二千五百石ニ而
東照宮御後府より 関東御下向の時
無處仕合ニ候ニ付 本所ニ帰り
候

台徳院殿より御鷹并馬拝領仕候
めおろし御座候ニ而是ハ元和七年
在邑の時台より被召上候處ニ
同年七月実翁と嫡子相定候
ゆへにおいて 御書成候ものニ候故
ふいつらく
一 横山相果申候 其後より拝領仕候品
住居ニ而御書在中本
一 我等唯今之拝領仕候地者先年間田

尻ニ而三千五百石江戸へ急度致成ニ而有之
申度候
一 江戸へ唯今迄被為成候千五百石ニ相成
余ハ千郷ニ被下候様ニ被申候
一 半郷給(?)ニ而五百石毎割(?)當之郷
ニ而御出郷居申候ニ村中ゟ相届ニ而五百石
ニ而可有之候ハ又急度相済候様ニ
被成可申候
一 急度相行結構ニ郷中ニ而可有之

村中千石之分ニ候ハ々被
御見計ニ被仰付候ハ々被下候ニ
被成ニ而ハ御座候上ハ迄ニ御座候当
御伝候被仰付候様ニ可有御座
相成候故ニ被成可然候ハ々相届
御書置申候間其ニ被仰候様ニ被成
被下候様ニ頼候間後日ニ無之以上
元和七年
酉七月廿日　結城(?)御津守(?)　秋次判

佐久間大膳墓
服部淡路墓

駿河にて被仕とかくらしか寛永
三年正月十九日死す程ヶ谷蔵出看
橘樹郡地方村清善寺に葬る
荏原郡池上中川寺に葬
其外利獨也数所有墓
○先祖實同満仲より出るのよし

如見とる家植謙は橘樹郡翁知に
安堵
○源頼之所持は多彼破の矢の根古
来傳来
○橘樹郡地方村龍山古鐘は原寺
圓基より代々居住せし故の役より
らと芸文七年同和東の方へ
揚和替と称しらい
正應元年より凡五百八十有余之和之年十九

月済出来候に陣屋と称して
家人ともしいつ了

頼重

治兵衛　初　新十郎

慶長八年明細十四歳の時大坂へ
人質として来り其後家を継る
○同七年訴座住として二百石
余拝領○同年不幸して九月明細五書院

寄○元和二年正月十二日病没○
白依済敷の上落彼来○同七年十七
月明細家督○寛永九年十二月廿
六日病死○今として被武百石頂明細
加判日代○寺沢宛行間取
物仕の為評判して○慶安二年
二百九十石拝領池上寺
寸孫

二男
頼隆　半七郎
寛文九年 初而
東照公より召出され忠輝勤仕四代目
半七郎於亮より家断絶

三男
頼之　惣右衛門

四男
頼久　新左衛門

東照公より召出され元和二
年六月廿七日死弐拾壱歳於摂州
額田郡地蔵村清善寺に葬
子なく家絶

五男
頼永　市十郎

六男
頼平　半左衛門

女子　千代局

日向守 初新十郎 治繁

頼宗

初 頼家 頼定

大猷院殿ニ初見 寛永十七年七月廿二日 同年月日不知〇書院番
三百俵〇若年寄二年 月日不知 奥澤ニ
庫段肥前国高来郡ニ而小
加増三百俵〇同二年十二月廿八日
家督〇慶安二年 月日不知 麻布坂

役料廿町畫海坂ニ而五千石
御鍋嶋殿支配の御書院番引
万治元年 月日不知 辛業〇同二年八月
廿日御奉書〇同二年十二月廿八日
加増三百俵〇二月廿八日病ニ而寛文
二年五月二日信濃国小諸城ニ移
〇同二年四月日光山ニ而依奉
是ハ加増代り二千日

運上○同年十月廿八日大坂出買代
十二月廿六日出勝翌年の春二千日乃
出勝ハく播州銀務郡の出代ともに
○同六年六月廿日丹後国宮津城
主京極丹後守所領收公すへき出買付
代并ニ其絶後郡より出る○同八
年初肥前国高来出買代○同
十年六月廿六日出雲請奉行○同[illegible]
六月廿六日出羽年寄奉行様○同十一

年十二月廿六日下総国利根川新発
見立○同年十二月廿二日出勝六月十日
帰帳○同年十二月廿三日同上出開作
付ゝ運上代官支配屋根奉文箕根倉前
安堵○同年下総国出大草村惣平
郷訴出る新田御停止石高
定之○同十一年十二月廿六日京都町
奉行相摸守叙爵日向守と改
○延宝六年京都町病死

罷有ける処を討れ同年十月
十八日尾張國鳴海乃驛にて死去六歳
其末同寺ニ葬

○頼宗か妻
頼宗死後延宝七年十二月廿一日
年若ニ乳はなれしに出生ニ石
出されし分奥山年中御目見得尾上
とき名代母とゝ扇のおしく大
奥山年中寺御用候て石稲人枝

頼俊
播州にて元禄十二年九月八日誕生
同十七年十二月九日死去六歳
同寺ニ葬
八太郎

頼方
初頼路　改常　改時
源五郎　初宗代　熊之助

二歳の時万治二年十一月十六日大奥
より出て梅近江局の庭まで行九歳
の時寛文六年八月八日御城より
御下り〇同十一年二月八日御袴着
初見〇同十二年閏八月廿九日酒井雅
楽頭宅へ父子とも召され父日向守
忠(殿)ハ相続の御助も治定に被
仰付され〇延宝六年七月(綿)
日父宮郷と共に病にかかられ

殿の生前に出府を仰せ出され八月朔日
家督之十一日東照宮へ同年十月又下
向の時ハ海津にて(跡目相続)ハ
同年十二月(御)家督ハ五千石〇同七
年二月十日家督御礼御目見の日母と
共に(帰)る〇(合)郷ともに〇元
禄六年十月廿六日駿府加番九
月朔日出府〇同七年十月廿六日
帰国〇同十年十一月十日出府被

○同年十二月八日布衣○同十二年
四月廿五日居宅より出火火元の者とも
○寛永元年十月十二日小姓組番
方角によりて大番之組に減せられしよ
りて小姓組番へ入○（同二年四月十九日御番頭被）同二年十月
廿六日御上洛の時ハ前駆附属之一人
引渡御小姓組○正保元年五月
七日死す法名日〔?〕葬同寺に葬

頼尚

弥十郎　初　源之丞

實同姓八左衛門某長男
寛永三年七月廿九日生る子○同十
年十月廿八日初見○正保元年七月廿
三日家督相続○寛文六年十二月
廿八日駿府加番九月廿日御番同七年
正月廿日帰着○同八年十二月廿六日

其清取〇同年七月朔日依念少全
より拝せし野馬一疋拝領〇同
十二月細川和泉〇同十六年十二月廿
四日病死〇同十八年十二月廿日實無
方伯父立花飛騨守殿養子飛騨守の嫡
子となる番頭被仰付る
りうらく同六日御目見え壱〇為同月
廿一日病死〇元文四年三月十日死
五拾四歳同寺小葬

頼紀

源左衛門 初 式部

享保十一年十二月十二日初御目見〇元文
四年十二月二日家督并五百石〇寛保
二年九月十二日死二拾四歳同寺
ニ葬

頼恭（ゆたか）　治兵衛　初　八左衛門

実ハ杉本某御頼常曽孫
延享二年十二月五日養子家督寿
今ノ同年十二月十二日初見ス○寛
延二年五月七日渡御加番九月組
日光勤ノ同三年十月十五日帰謁○
宝暦二年十二月十二日同死ス小十
郎杉亮実断絶ノ之ニ付御見合ヲ
寄合○同三年十二月六日御番入○同十二
年十月十三日寄合寄合所番入○
明和六年十月十日死ス五十四歳四谷
寺ニ葬

頼直　伊織　初　帯刀　二　鐵郎

明和六年十二月廿七日家督相続寄合
安永二年十二月廿二日初見ス○同四

年五月九日駿府加番九月五日
御役○同九年十月十五日御暇○同
八年十月十五日大番頭○同年十二
月十六日布衣○天明二年二月十五日
小普請組支配○同四年十月廿日御
小性組番頭○同年十二月十六日叙爵
筑前守○同七年二月廿六日[illegible]
の中にて老和○同年四月廿九日御
免○同年八月十八日病免○家督

九年六月十七日掌同出張一條の台
羅を差出し時服二領賜○同十三年四月
○十八日 先代より相伝の猿墓目の札あの
支は古来より行ひ処世上にては
継縁の家名札といふ
○当家ハ同姓古今として来れ門
姓を諫すしさらにあり先祖
摂津守ハ出家せし後
中分同年十八日職当に出家

いよ／＼来り候節ハ　御聴ニ入しら
去年能勢河内守御小性勤候ら
有徳院殿　御意ニハ其方何姓ニも
無用ニ候今まて絶ぬるやと存し絶ぬるさ
河内守江請ニ候ハ毎月十八日晴天乃
まて何石無用ニ候よし申上候へハ御賞
美の御意ありて深く御心ニ連綿と
ありし

寛政十年四月十八日　大久保備前

東照宮御代
能勢　源姓　高二千石
家紋　獅子牡丹　摂津　矢筈
足利将軍より拝領　十二目結　五七桐
能勢摂津守頼次二男
小十郎
頼隆
慶長九年　初而　御目見
東照宮江御小性ニ而召出され采知千石

やされし○大坂両陣父子ともに供奉す○
元和二年より江府に出仕す
台徳院殿に奉仕○同七年兄秋定
訴訟有しに依て摂州能勢郡
のうち千五百石余を賜はる○年月日不知
供奉○寛永二年七月四日洛の
供奉○同九年十月廿四日兄某直
同十年二月二日九州〈発足〉○年月不知
仙台へ御使○年月不知会津南領へ

屋○年月日不知摂州姫路○屋敷○年月日不知長井
萩○屋敷○肥後熊本○屋敷○同唐
二年十二月十二日死七拾余歳
別荘京都池之上東門寺に葬

寛永三年三月廿二日没

頼春
勝右衛門 初 藤三郎
寛永九年 月日不知四書院番○寛文
四年十月廿九日死六十三歳

出奔

頼負　太郎次郎
紀伊殿ニ仕

頼澄　山縣弓　初　彩三郎
土屋為春養子ト為ル

頼廉
初　頼周
半十郎　初　慶之丞

頼亮
半十郎　初　小太郎　小八郎

宝暦二年八月廿一日初見○同四年
十二月廿六日家督○明和二年六
月十一日桐間番○同年十一月十日
小普請入依願○天明二年十二月廿
六日御小性組○寛政十一年九月十
九日死五十九歳同寺ニ葬

實同姓惣次郎隆幸か女
享保十一年四月廿八日[illegible]とゝ同
十二年十二月十六日[illegible]となり
同十六年十二月廿八日中奥小姓になり元文
二年六月廿七日大御所附になり同四
年正月十日御帰[illegible]寛延二年
九月朔日
有徳院殿御附にて中奥小姓[illegible]寛延元年
年七月十二日奉命宝暦二年

十二月廿九日死す年五十二歳同寺に葬

頼暢

源蔵 初 源之助 喜助

母先妻

實同姓十次郎頼賢か二男
宝暦二年十二月廿八日[illegible]從兄弟
の中なりしかとも頼亮の兄[illegible]
新[illegible]同廿九日頼亮か世をつく

三七忌服とうく志のなる同年十
二月十六日されし頼亮存命のうち
不庭の事ありしとて家を断絶
頼暢に養子にあつけられ（たまはる）
其後忌服請しのうく裏家に
頼暢一生懐を王之（さきに）仰出され
天明二年十二月廿九日
有徳院殿御法会の赦に頼暢懐
ゆるさる寛政六年十二月廿八日死

大壽院之寺に葬

常憲院殿代

能勢　高百五拾俵

源姓　寛政十二同組　東方組　先名

能勢新左衛門能勢次男

新五郎

賴房

元禄六年十二月廿六日新ニ召出され

初メ小十人番下番〇同年五月十八日

此年御番入〇同七年五月廿六日隠

次男○同年十一月九日小普請入
○享保七年十二月廿七日田安小十
人組○元文五年八月番頭○寛保
元年六月十六日死六十六歳法名日
谷中浄泉寺に葬

頼利　新蔵　致仕　樂花

寛保元年九月 初目見 家督 小普請

請○寛延元年十二月四日一橋小
十人組○同二年十一月十二日同所
大番○同四年五月 初目見 福兄九
○明和二年閏月十日致仕○天明
七年八月十二日死七十二 法名
寺に葬

頼定　新之丞　初　次郎七郎

實長 孫七郎 號貞之曾

明和二年四月十日養子家督小普請

請○同三年七月二日田安奥右筆見

○安永二年八月十八日掃部頭組○

同四年閏十二月廿六日病死

常憲院殿御代

紋揚　高二百石

源姓　家紋揚羽蝶　捨揚

十二日　名害

重頼将軍之御

五七桐

鏡惣右衛門之三男

甚平郎　初　露重

頼旅

寛文元年十一月十八日御小姓組○之番

二年七月十九日死　年七十六　葬大清

知之并寸小普請

頼一

服部与 初八十郎 源七郎

与十郎 甚四郎

元禄二年十月十二日家督小普請
○宝永四年十二月十八日小姓組○
同六年十二月廿七日小納戸○正徳六
年五月十六日小姓組○享保元年
八月八日小納戸頭取○同十三年六月
廿二日小十人頭○同年十二月十八日
布衣○同十六年四月廿八日西丸御
徒頭○同二十年十月朔日御目付役（同十四年十二月廿八日西丸御目付）
○寛保元年十月十五日加役御免
○寛延元年十二月十二日□□奉行（○二月十五日町奉行 同年）
○宝暦二年三月廿八日西丸御旗
奉行○同四年十月廿八日病免
○同五年正月十日死六十六歳

同寺ニ葬

一英

甚四郎　初　助之丞

元文二年九月十八日初而御目見○
浚明院殿山王江御宮参之節○
寛延二年十二月廿六日御小姓組
○宝暦八年八月廿二日家督○同六
年十月九日紀伊守番○同十年
六月廿二日出役○同年十二月十八日
布衣○同十四年四月廿日死四十
三歳同寺ニ葬

頼復

甚四郎　初　助之丞

宝暦十二年十二月十八日初而御目見○同
年九月六日
孝恭院殿山王御宮参之節

〇明和元年七月四日家督、小普請
〇同六年十二月廿二日御小納戸〇同年
十二月十八日布衣〇安永二年十一
月廿九日本丸御小納戸被仰付為御用時
服二拝領〇同年月日大納言様上覚御疱瘡ニ
ニ付酒湯之度〇
御酒湯被成御本丸二度之御祝儀ニ付拝領
小柄御役附等小柄拝領
御酒湯被成御縁側大屏風〇天明四
年頭の御礼者候〇天明七年
十二月廿二日本丸御小納戸被仰付為御
時服二拝領

頼臣
助之丞　初　要人
寛政六年八月十六日御留守居同年
九月廿七日
大納言様御小性御番入被仰〇

同年十二月廿七日病死　中書院番

厳有院殿御代

能勢　高七百石

源姓　家紋　獅子牡丹　桔梗　十二日足

京[illegible]より存候　五七花桐

能勢孫作頼春次男

頼平　半左衛門

寛文元年十二月廿八日初御目見え

中書院番○天和二年十月二日卒

頼氏

東照門中西之院○同月廿二日支料呂
信之於稱子御会之七百石兼知之於
如之○元禄元年十六月九日死去之（同年十二月十五日布衣）
賜地以○元禄九年月日布衣○同九年十二
月五日死七十二歳武州荏原郡池
上本門寺之葬

小林鬱　初萬之郎　外記

頼鹿

定宝元年八月十二日八歳ニテ初見之
○元禄四年十二月二日家小姓組○
同九年十月廿二日御納戸○同十年十二
月廿八日桐之方之畏○同十七年十二月
十二日御小姓組○元禄十二年五月廿五日
死之稽四歳同寺之葬

小林鬱　初　二郎之郎　小林郎

頼治

実ハ比留勘右衛門頼貞次男 紀伊殿家来

元禄十二年七月九日家督小普請〇同十六年十二月九日甲府書院番〇享保八年八月四日死年五十六葬同寺小日向葬

與市郎 初 小七郎

頼尚

實ハ同姓惣八郎隆章之男

享保七年八月二日部屋住〇同八年十月廿九日家督小普請〇元文元年八月八日死年三十葬同寺小日向葬

半左衛門 初 玄蕃

実同姓長平郎頼尚四男

元文元年十月四日部屋住家督小

當番〇同八年十二月十一日御目見〇元文
二年十二月四日西丸小性組〇寶暦
十一年八月二日本丸勤〇同十二年
十二月廿八日西丸附〇安永四年四月
廿四日西丸小性組番頭〇同年閏十二月
十二日布衣〇同八年四月十六日本丸
丸勤〇天明元年十月廿六日西丸附
〇同六年閏十月廿一日本丸勤〇寛
政八年十二月廿八日願之通致仕

〇同八年七月十九日死七十一歳八森門
寺ニ葬

頼常

兵市郎　初　造酒之丞　母某
安永四年閏十二月十八日初御目見〇寛政
八年十月四日家督小普請入

厳有院殿御代

結城

源姓　高五百石

家俊　御小性組　摂津　十二月生　[illegible]

重紋 [illegible]　丸七花桐

結城越中守頼之二男

三千郎

頼香

万治元年八月廿二日初而〇寛文二年十二月廿一日御書院番足米百俵
[illegible]

○元禄八年八月四日病死○同十五年十月十日死于時十四歳武州大塚西光寺に葬

頼成

二十郎　初 甚十郎 甚九郎

貞享元年八月十日初見○元禄六年十二月九日小性組○同七年正月廿六日桐之間番○同年九月廿八日小性

組○同十四年五月十二日依病御免○正徳元年五月十八日小十人頭加秩弐百石 此時元の足米五百俵收公せられさらに地方百石を相加へらる ○享保二年二月廿一日出羽守御の時宅依仰付られ同月廿一日加納遠江守以て遠江守しる早来迄出えをこ下さる十日来出城して小十人今度御役に宛候仰付られたてまつりて病不来用意ありこれハ

付テ江龍の儀と也方人へ之并し傳遣き
為〇同年十二月七日小荷門の邑ニ依
奉り付出勤をも可被仰付と思召
江川氏ニ葬る〇同十年六月廿八日死
年九歳同寺ニ葬

頼董

頼暇
三平郎
初 喜平郎

正徳二年七月晦日初見〇享保十
年八月二日屋鋪小普請〇同十一
年六月十二日御書院番〇同十八
年十月廿六日吹上ニ而大的上覧
〇同十九年十二月九日之為御鷹〇同
二十年二月九日吹上大的上覧〇
寛延二年十月廿二日屋鋪御役〇
同四年十月廿八日死年四十同
寺ニ葬

頼侯

甚十郎　初　五左衛門　甚十郎

元文四年十月十八日初見○寛延三年十二月廿日小性組○宝暦二年二月九日辞之
浚明院殿大納言之時初見○同四年十一月廿八日死二十七歳同寺に葬

頼寛

忠左衛門　初　三千郎

實同姓甚十郎頼尚八男
宝暦五年六月廿四日頼侯養子○同年十二月廿七日家督小普請○同六年二月十八日初見○同年十二月十九日御書院番○安永二年十一月十七日夜於公自害四十一歳同寺に葬

頼近　傳十郎

安永二年巳二月六日生部屋住小普請〇天明六年十二月二日死二十歳

同寺ニ葬

頼愛　留福　初 卯之助

実同姓河周与頼忠二男

天明六年十二月廿六日家督若年ニ付家督

小普請〇寛政六年十二月廿一日中

里村河周屋敷ニ而卒　上総

常憲院殿御代

組頭　高三百俵

源姓　家紋　十二目結
十文字丁子丸ニ舎石

組頭鬼十郎兄之次曾

助右衛門　初　長十郎

之助

天和二年四月五日桐之間番ニ被
召出二百俵○貞享二年三月廿八日
御書院番○元禄六年十月九日

死ス年十一歳武州牛込榎町池上本門
寺ニ葬

頼利

喜太郎 初彦太郎 惣三郎

實ハ太田喜之助利政ガ三男
元禄六年十二月十一日家督小普請
○同七年九月十八日桐間番○同十
年十月九日書院番○同十六年二月依病

免○寶永六年四月八日死ス年廿二歳
同寺ニ葬

頼常

助左衛門 初 猶助

實ハ安藤九郎左衛門友定ガ次男
寶永六年六月廿二日家督小普請
○享保四年十二月十二日書院番
同十年六月廿日病免○同十二年

賀日曾根内匠組より御目附相勤○同十
五年十二月又日西丸御持弓頭○同十八日
御持之存候○宝暦九年八月廿二日
死六十二歳大久保法昌寺ニ葬

頼秋　又十郎　初　登太郎　主水
實ハ筧新太郎正平ノ男
元文五年五月廿二日賴年長子○寛延

三年十二月廿日□〔西丸ヵ〕小性組○宝暦十一
年八月三日番頭勤○同十二年
三月廿七日中野桃園ニおゐて御的上
覽海寿射ノ矢番相勤候○同年十二月
十五日御先手附○明和元年十二月
廿八日病免○同二年十二月十九日被
仕陸箱之役也○安永二年五月廿
日死五拾二歳同寺ニ葬

国立公文書館
National Archives of Japan

頼廉　又十郎　初　安之助

明和二年十二月九日家督小普請
○同八年九月廿七日浜御庭奉行
大納言様御時船二而役○天明二年
閏廿七日同人蔵組頭○寛政元年
十月晦日御役御免ニ付小普請入
享和四年子七月廿一日致仕○

頼章　主水　初　安之助

寛政元年八月十九日初見

有徳院殿御代

結城　高六百石

源姓　家紋　獅子牡丹　十二目結
　　　　　　矢筈十文字　桔梗
　　　元禄九年より而紋　又七郎　桐

結城半十郎頼隆次男

秀勝　初　次郎九郎　又次郎

頼貞　初　秋直
紀伊大納言頼宣卿へ御附ニ被遣

志摩守今令持枝宛にうまれ〇二歳にて
年九月六日死去十歳大全寺に
葬小葬

隆重

數八郎 後 小三郎

初 頼亮
寛文九年 初めて紀伊中納言殿へ九
歳のとき出仕して後いとまたまわれ現来

八指石にうまれ
有徳院殿紀州より御出府の時八郎の
時享保元年九月廿六日
御目見百俵中小納戸格仰付られ
紀州よりしたかひ三百石にて御國元
引移りたまふ〇享保二年十二月八日
死去十七歳〇〇寺に葬

頼忠

河内守
伊平郎 初 小太郎 亀次郎
享保二年四月廿六日御書院番〇
同四年十二月廿八日
長福君御小姓〇同八年十一月十八日吉
西之丸ニ参る〇同九年十二月十八日
叙爵〇同十三年十二月小姓組頭格
〇同十九年八月四日御小姓〇同十二年
四月日免之依願〇同十四年
四月十日四ッ谷場所の付弓之者与
御番入組頭一ケ条願候
与頭役被仰付候〇同十
六年十二月廿一日弓之頭と勤
壱番と申し小姓組番頭長
同席の内 是利墓所御修斯
ぬ法要日之一巻 河前ニ而
候〇元文二年六月十六日

右当番願　刑部殿へ出陣願

蔵人をもつて時出仕之處被出罷業

もしかれしく唐書ならしく白銀

御の私宝文附より陣羽織拝領

○同二年十二月九日を以傳ふく

流播る仰付られ白金衣免許

○寛保元年　月頃日出納戸

新田谷出座通候之處御手同

二百出座致来候之所[illegible]

○羽紙出府和申

有徳院殿御存之砌より古方以後とも

毎月出合候之處仕候處会所

上さとの者へ甘梅を毎月致度人

直来候仕候上下金共[illegible]

是の上之業家ニ而不梅之以

先祖忌日十八日と定毎月出合

もとり

○寛保元年十二月十八日加積之

百係○寛元二年九月廿日為後見
依之出家のときにはまてのかく
出家名行賀○寛元四年七月十一日
京へ向わし流罪さる○同年七月
十二日上洛後當格出家さる方死○明
和七年十八月二日出家手被配流
○建長二年十二月十四日死去二十九
歳同年二葬

頼継

幼八郎 初 名文 仁平郎

實祖北條右京大夫英満

寛元二年十二月十日誕生子

○同四年十一月十九日初見○富應

十五年九月廿八日上京後書

四和二年十二月廿二日任小納言○同

年九月二十日死二十九歳同二十二日葬

河内守　初　小六郎　同備中守

頼隆

実頼隆惣領

明和六年十月廿日嫡孫承祖○安

永二年二月廿二日初見○同四年十

二月八日叙爵小普請○同六年十

月十九日御小納戸○同月廿二日兒

附○同年十二月十八日布衣○同八

年四月八日一緒合○天明元

年四月廿一日御小納戸○同年十一月

廿八日御免小納戸○同年十二月

廿二日羅漢寺へ依召為相番二月廿日

何願之所○同六年正月七日罷

免勤○同年十二月廿四日二丸掛○同七

八月八日西丸勤○寛政六年十二月

十八日叙爵（同備中守）○同七年十二月廿四日出仕

四廉持依願○同年四月廿八日河内

守○同九年七月廿九日御小性組頭

頼常

正右

寛政六年閏月二日

竹千代君御伽○同年十二月廿八日家督

元和○同年九月廿六日

若君御傅○同十年七月十六日西丸御小

姓○同十年十二月十三日於御前元服之

二伝弓剣村角門月時腹之

台徳院殿御代

紀勢

源姓

高武千石

家紋獅子牡丹 桔梗

十二目結 矢筈

元和九年より御紋

五七花桐

紀勢摂津守頼次四男

市十郎 初 嘉松

頼永

元和九年 月 十一歳の時御目見□

寛永二年朔日加知八百石
余〇同年朔日西丸御書院番〇同
九年十二月廿九日御船手頭〇同十
年二月七日並加増貳百石〇同十
〇四年十二月十七日御徒頭〇正保三年
正月廿三日大御番之旅
御鎗奉行御預被附〇寛文二年十月
九日新番頭〇天和二年十二月廿二日
加増七百石〇同年七月廿八日死七
十四歳法名紹仙池上本門寺

子無

出雲守 初亀之助 権十郎

頼寛
初頼相 権之助 対馬守
寛永二十年朔日御母近江局の
侍女として五歳の時より
厳有院殿御部屋附御小姓相勤
正保三〇明暦三年十二月廿八日

中奥の小姓となり、三百俵をたまふ○寛
文二年二月廿日小姓○同年十二
月八日加秩五百石○同月廿八日叙爵
○同六年十二月廿五日加秩五百石○
延宝八年九月八日職を辞し寄合
○同九年五月廿五日御書院番頭
○天和二年正月十一日寄合に列す年十郎
一正月廿五日百石を加ふ○貞享元年

月廿五日御書院番頭となり十年
御書院番頭を辞して寄合に列す
か○同二年ニ所々の仕置を承り
細部仕置し、所々をしらせ家臣
○元禄元年九月十二日大坂町奉行
加秩五百石をあはせて千五百石○同十
年十一月十二日町奉行○同十年
四月廿八日病により○同年十二月廿七日
致仕十八年四月寺に葬

一正　半十郎

寛永二十年（月日不知）三家の時より近江
屋の傍にて
[illegible]町[illegible]と[illegible]○万治二
年十二月十五日[illegible]○寛文元年
（月日不知）[illegible]○天和二年（十二月十一日）（月日不知）
[illegible]○貞享元年十一月十七日死
[illegible]郡[illegible]年十五

[illegible]寺ニ葬

頼恒

出雲守　初権九郎　市十郎

天和二年（月日不知）初見○貞享元年
十二月家督○二百石小普請○同年[illegible]
十二月晦日（伯）父頼[illegible]ニ付[illegible]断
絶

頼恒

出雲守　初　権九郎　市十郎

実ハ同姓平十郎一正次男

元和二年七月　日不知　初見○貞享元

年七月　日不知　寛文六家督小普請○

同八年十二月御番入　手元召

収公○元禄四年十二月二日小普請

支○同六年十月十四日ニ而病死歳○

同十一年七月　日不知　家督○同年十月

廿二日御番入御書院番○同十二年閏月廿

日御小姓組○同十四年八月十六日

新御番組頭○同十六年　日不知　組頭御役御免

○同十六年七月廿一日御免辞

同月廿八日病死○宝永六年八月廿

七日病死葬行○正徳元年十月廿

病死○享保七年四月廿一日小普請

支配○同十二年八月廿一日病死○同

年十二月十九日致仕之同日信濃守○寛
保二年十二月九日死七十二葬同寺（池上本門）
小姫

頼香
周防守　初 藤八郎　権九郎
市十郎
実頼寛二男

元禄十一年八月廿二日家督○同年
十二月廿八日叙爵○宝永六年閏正月
御書院番頭○享保十一年十二月十九日
大番頭○同十二年閏三月廿八日同組
与頭○同十九年十月八日小普請組支
配○寛保元年五月廿八日甲府勤番
支配○同年　月　日辞職周防守○
宝暦四年九月廿八日卒[illegible]○宝暦

六年十二月廿二日死六十六歳同寺
ニ葬ル

頼徳　市十郎　初　権十郎

寛保元年十一月十八日初テ見ユ寛延
二年十二月廿二日病免ニ書院番ニ列シ宝暦
六年五月三日致仕ス宝暦十二年
十二月二日死六十四歳同寺ニ葬ル

頼愛　権九郎

宝暦十二年十二月廿七日家督ヲ継ク小普
請ニ入 安永二年十二月廿八日死二十
八歳同寺ニ葬ル

頼寛　初彩俊　市十郎　初　平蔵

實門跡第四一乗宮
寛保四年三月八日於東武誕生
小室宮○同年四月廿六日初而入寺東求
癸年二月廿一日為親王宣下此日得度○同月学
四月廿一日出家為親王○天明元年十二月
廿八日為准后○同八年十月廿日出家
為親王○寛政二年十一月四日落飾
附代七月廿八日於御所○同年十月
三級左近衛中

梵雅　仙洞　寛光門跡　選奏四巻
業平八六日同月廿二日新造門跡へ
之遷幸の時御所より入御
同月廿日
仙洞　遷幸十二月四日
寛光遷幸右親王御の時拝賀之
取て出立○同六年四月八日
帰陽○同六年十二月十九日御使番

同年十二月廿八日叙従四位下同九年
六月廿六日任右近衛権少将同七月朔日
叙同十年十月朔日御遷

東照宮御代

能勢

源姓　高野日向守信

家紋矢筈及丸亀甲

頼光より出摂津国能勢郡城主能勢

因幡守教勝より五代源右馬允津守

頼安

日向太郎

東照宮及駿府より出仕の時元和年中

御勘定方にて御目見す○御勘定組頭
加役勤仕後糺す所あり○寛永年中所別
天草一揆討伐として松平伊豆守
御陣の時目付として軍中之様の
次第を彼地より見聞自身にて言上し
形しかしにしてかの勤め
帰府後加役勤仕より糺す所あり○二百俵二十年
十二月廿七日死根津西蓮寺に葬
曲林

頼重
庄三郎
井原伊兵衛より○御勘定之方○御勘定組頭○病免小普請
○寛文六年十月十九日死同寺に葬

頼次
武兵衛

部屋住より御勘定〇御勘定組頭
癸十日付関東組頭加り
〇病気小普請入〇元禄十二年十二月廿八日死 同寺ニ葬

某 兵右衛門
元禄三年十二月家督
〇遠慮家継

頼賢 五郎左衛門 加藤九郎

部屋住より御勘定〇御勘定組頭 元禄三年
同十三年十二月 手代其五十石
〇病気小普請入〇享保四年十一月
十日死 同寺ニ葬

頼胤 清右衛門

実同姓権左衛門某次男
享保四年十一月廿七日家督小普請入
〇同九年八月廿二日甲府勤番〇
同年九月廿八日御役御免〇同十二年
二月十二日継目〇寛延元年十二月廿
七日死 四十 葬本府中 大泉寺ニ葬

葬

大御番　初　彌之助

殷方

延享元年九月二日家督○宝暦（甲府勤番）
八年四月朔日ゟ甲府勤番○同九年
十二月十七日番頭○十年正月勤座
指控○天明八年二月廿七日死　葬
（○明和七年十二月廿三日病免○安永二年四月廿四日甲府勤番）
某同年月日葬

頼次　　万蔵

實父安平御清右衛門
安永六年五月廿五日部屋住○天
明八年四月八日家督甲府勤番
寛政八年七月朔日ゟ甲府勤番
十二月日○死

横田河殿

結城　高百弐拾之俵

源姓　家紋　亀甲之内菱
　　　　　　[illegible]五七桐

頼光より出摂津国結城郡住

結城太郎頼時次男源左馬尉秋

弘代

安和 ─ 左馬尉

竹橋御蔵ニ而相勤候処中奥御定〇中刎
正武役〇死

頼良　又之進

中刎武役〇死

貞成　又太郎

貞享二年九月（日不知）櫻田御門御蔵ニ而
家督相続代役〇宝永二年（月日不知）
文昭院殿御代ニ御移の後御蔵御門御
代役〇正徳二年七月廿八日死五拾
二歳

頼房　又太郎

平野[illegible]
庚伊東[illegible]水[illegible]二男

一正徳二年五月廿九日建長寺○同年
十二月廿八日父死跡式被下置候同八当
御渡○同年十二月十六日家督小普請○
享保十六年五月十九日大番御番済
小十人組○同十九年十二月六日死二十七歳
谷中一乗寺ニ葬

頼維
幸次郎 初 竹五郎

享保九年九月六日家督小普請
○元文元年四月十八日小十人組○同
五年十二月廿六日死二十一歳同寺ニ
葬

頼寛
源八郎 被仕若随
實佐藤小源太信貞四男
元文五年五月廿一日去年家督小普請

請ノ寛政二年十二月廿五日叙任

頼泰

又多満　初　大蔵　？

實佐伯少将源左信員三男
天明元年十二月廿二日為子ノ寛政二
年十二月廿八日家督小普請ノ同四
年九月廿五日初見ノ同十年十二月
廿九日富士見宝蔵番

日本政府図書
内閣文庫
国立公文書館 National Archives of Japan